

「女性として」書く ―― 20世紀英国女性小説の試み

水尾文子（英文学、ジェンダー研究）

19世紀のイギリス女性は、狭い世界に住んでいた。この世紀の半ばには、全国を鉄道網が覆い、1851年のロンドン万国博を契機に、旅行が一般化したにもかかわらず、女性の一人旅は稀であり、一人旅の女性を泊める宿は皆無であった。女性の高等教育は普及しておらず、中等教育を受ける機会も限られ、職業選択の自由も少ない上に、結婚の相手もかなり限定されていた。これだけで、女性を取り巻くこの時代の環境がどのようなものか、容易に想像できよう。しかし、そのような環境に置かれながら、女性の立場は、ゆっくりとではあるが確実に向上してきた。

1. 「家庭の天使」という神話

18世紀中葉に始まった産業革命は、それまで安定的に推移してきたイギリスの階級社会を揺るがすことになった。階級間の人口移動が頻繁になり、とりわけ、中産階級が膨張してきたのである。こうして、社会規範の再定義が必要となったのだが、その中で最重要項目と考えられたのは、男女の役割の再確認であった。既に18世紀に、女性のあるべき姿、振る舞いを規定するマニュアル本「コンダクト・ブックス」が一般的になっていた。女性に関してのマニュアル本が普及したのは、天地創造の時代にさかのぼり、アダムのあばら骨から生まれた女性は、近代社会でも、男性より劣った存在であるという意識が、社会全体にあったからだと思われる。そういった意識を持って、男性が女性を教え導くために存在したのが、コンダクト・ブックスであった。

日本語で、男性が配偶者のことを表現する言葉の1つに、「家内」という言葉がある。これは、日本の社会で、家が妻の居場所と規定されたことに由来するが、19世紀のイギリスでは、同じ意味の言葉が、「家庭の天使」

という言葉で表現されていた。その名称は、良妻賢母を理想の女性像として描いた、コヴェントリ・パトモアの詩集『家庭の天使』(1866)に由来する。家庭に入って天使の役を演ずるためには、結婚しなければならなかったから、結婚は、この時代の女性にとって、人生の一大事であった。女性作家の作品には、登場人物の結婚が多く描かれる。ジェイン・オースティンは、小説『高慢と偏見』(1813)で、5人の娘達を裕福な若者と結婚させようと躍起になる母親を笑いの対象として描いている。¹しかし、この少々度が過ぎた形で、娘の幸せを願う母親の姿を笑うことは、コンダクト・ブックや男性社会の規定する、女性の幸福や役割を笑うことになる。

幸いにして「家庭の天使」の座につくことができたとしても、それで、一牛の安定が保証されたわけではなかった。ヴィクトリア朝の既婚女性は、度重なる妊娠・出産という、心身を疲弊させる現実の中に生きており、出産時に命を落とすことも稀ではなかった。また、居場所である家についても、常に、不安と隣り合わせであった。1882年に「妻の財産に関する法律」が制定され、妻に、固有財産の所有が認められたが、その法律が制定される前は、妻や娘には、相続権が与えられていなかった。従って、夫の死後、長子がない場合、遠戚の男子が相続し、妻と娘は、財産どころか、住む場所まで取り上げられた事例が少なくない。妻に相続権が与えられないことは、また、妻が離婚を考える際の障害になっていた。こういう事実を考慮すると、「家庭の天使」は、家庭という、鉄格子の見えない牢獄に閉じこめられた女性の不自由な生活を正当化するために、男性が考え出した美辞麗句であったと言っても過言ではない。

女性を描く小説で、オースティンと対極にあるのが、センセーション小説と呼ばれた、女性作家による犯罪小説である。ここには、「墜ちた女」や「狂女」が頻繁に登場する。しかし、「墜ちた女」も「狂女」も、「家庭の天使」と同様、ヴィクトリア朝の社会体制が定義した、当時の女性のステレオタイプでしかない。というよりも、「家庭の天使」と「墜ちた女」や「狂女」は、一枚のコインの裏と表のような存在であった。

19世紀も中盤を迎えると、女性の立場を改善しようとする動きが生まれてくる。戦場の天使であった、フローレンス・ナイチンゲールは、その最

も顕著な例であろう。パイロン卿の孫で冒険家のアン・ブライト、女性のための医学教育の必要性を説いて、女性医師誕生への道を切り開いたエリザベス・ギャレット・アンダーソン、日本まで足を延ばした、大旅行家のイザベラ・バードなどの行動は、当時の社会では、社会が規定する女性のあり方に沿っていないという意味で、「逸脱した行動」と思われたであろう。彼女たちの足下では、フェミニズムという流れが静かに音を立てていた。

フェミニズムが思想として確立されたのは、18世紀末であった。メアリー・ウルストンクラフトが中心となり、男性優位の当時の社会構造に対して、性の平等化が唱えられた。ウルストンクラフトは、女性の自立を目指して、女子教育に力を注ぎ、また、その重要性を説いた著作を発表した。初期のフェミニズム思想・運動は、社会体制への反発に焦点が当てられ、それが、19世紀半ば以降には、次第に、婦人参政権運動という大きな流れになり、婦人参政権は、1918年に獲得された。

女性の置かれた立場は、時代や社会の違いによって様々で、女性を取り巻く環境も、一般化できないほど多様であったから、フェミニズム思想も、穏健なものから過激なものまで、多岐にわたっている。だから、全てのフェミニズム思想が、男女平等・性の均一化を求めているわけではない。20世紀初期に活躍した作家ヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf, 1882-1941) は、エッセイ『自分だけの部屋』(*A Room of One's Own*, 1929)により、20世紀フェミニズム作家の先駆けと見なされているが、彼女は、男女平等・性の均一化の考えにくみしないフェミニストであった。

II. 「家庭の天使」と女性作家

ヴィクトリア朝の理想の女性像、家庭の天使—その影響は、ウルフの家庭にも、例外なくもたらされた。上層中産階級の家で育ったウルフは、当時のその階級の女性がそうであったように、学校教育を受けていない。かわりに、幼い頃から、学者である父レスリー・スティーブンの書齋を自由に使うことを許され、家庭教師についてギリシャの古典文学を原書で読むなど、知的財産を築いていった。しかし、同時に、父の家長としての影

響力は強く、それは、ウルフをしばしば悩ませた。ウルフが13歳の時、典型的な家庭の天使であった母ジュリアが病死した。父は、亡くなった母の代わりとして、ウルフの異父姉ステラに、家庭の天使の役割を強要した。自伝『存在の瞬間』(*Moments of Being*)の「回想録」(“Reminiscences”)で、ウルフは、姉ステラを家庭の天使として動き出した家族を「哀れに錆びついた、キーキーと音をたてて動く荷馬車」(44)に例えている。その後、ステラも病死し、「父は、ヴァネッサ(ウルフの姉)を次なる犠牲者にするつもりでした」(56)とウルフは書いている。彼女にとって、家庭の天使とは、当時の社会体制が作った、家庭における犠牲的存在に他ならなかったに違いない。ウルフの家庭の天使に対する反発は「私怨」であったが、彼女は、それを自分を取り巻く狭い世界の出来事で終わらせなかった。

『家庭の天使』という詩集を出したパトモアにとって、家庭の天使は、絵空事でしかなかったが、ウルフにとって、それは現実であった。しかも、彼女の神経をすり減らすような過酷な現実であった。何よりも、それは、作家としての彼女の存在そのものに関わっていた。エッセイ「女性にとっての職業」(“Professions for Women”)で、「一旦ペンを持って書き始めると、家庭の天使は、<中略>こう耳元で囁くのです」と彼女は書いている—

「あなたは若い女性なのです。あなたは、男性が書いた本を批評しようとしているのです。賛成してあげなさい。優しくし、煽て、本当のことを言わないで、女性の策略を全て使いなさい。自分の意見を持っていることを誰にも知られてはいけません」と。(102-03)

天使の仮面の下には、彼女の父親の顔が見え隠れしていたのではないだろうか、彼女に同時代の女性を遙かにしのぐ教養を与えてくれた父親、しかし、家庭の天使の名の下に、母親を家庭に閉じ込め不自由な人生を送らせてそれを当然と見なしていた父親が。「女性の策略」とは、「賛成し」、「優しくし」、「煽て」、「本当のことを言わない」ことで、それは、家庭の天使が、社会から期待される、理想の女性像としての性質である。「策略 (arts and wiles)」という語に注目したい。“arts”も“wiles”も、「狡猾な手段」と

いう含意をもった単語であり、そのような言葉をあえて使うことによって、家庭の天使の存在が、いかに現実とはく離れた理想であるかを示唆している。そして、それは、ウルフのみならず、当時のほとんどの女性作家を取り巻く状況であったと推測がつかだろう。

更に言えば、ウルフをはじめとした女性作家たちに影響力をもった、父親の幻影は、父親を中心に機能する、19世紀ヴィクトリア朝の家父長制体制そのものの幻影でもあったと考えられる。その幻影は、家父長制社会の期待に迎合しないことに、罪悪感からの戸惑いを作家に持たせるのである。

幻影にそそのかされながらも、ウルフは、最終的に、それを乗り越え、エッセイで、こう続けている。「私は、家庭の天使を殺しました。もし法廷につきだされたら、自己防衛だと主張するでしょう。私が殺さなかったら、家庭の天使が私を殺していたでしょうから。」(103) 家父長制的思想を乗り越えなければ、彼女の作家としての人生はないという決意が、「自己防衛」という表現によく表わされている。それから、ウルフは、「家庭の天使を殺すことは、女性作家の仕事の一部でした」(103) と締めくくっている。

III. 「女性として」書く

エッセイ『自分だけの部屋』では、ウルフが考える、女性作家のあるべき姿が、具体的に示されている。このエッセイは、ケンブリッジ大学の女子学寮で、1928年、女子学生のために読まれた草稿を基に書かれ、タイトルは、「女性が小説や詩を書くには、自分だけの鍵のかかる部屋と年500ポンドの収入が必要である」(137) というウルフの主張からとられた。「年500ポンドの収入」とは、「熟考することを可能にする力」(139)、そして、「鍵のかかる部屋」とは、「自分の頭で考える力」(139) をあらわすという。個人ではなく、父親を中心とした家族が一単位であったこの時代には、「自分だけの鍵のかかる部屋」を持つことは、稀であったし、女性が仕事を持つことはなく、従って、「年に500ポンドの収入」を得ることは、ほとんど不可能であった。だが、これら2つの要素は、父親、家父長制社会の影響を絶つ手段として、作家には必須であるというのだ。

『自分だけの部屋』で、様々な文学作品を例にとり、ウルフが繰り返している主張は、女性作家が、「女性として」書くことの重要性である。女性として書くとは、どういうことだろうか。ウルフの時代・思想的背景に鑑みて、解釈の可能性がいくつか考えられる。「女性として」の「女性」とは、ヴィクトリア朝社会における女性の立場を甘んじて受け入れ、書くということだろうか。それとも、家庭の天使という犠牲者を生み出した父親と社会を糾弾する立場に立って、書くということだろうか。エッセイでは、19世紀の女性作家を例に挙げて、説明している。

まず、ウルフは、「女性として」書くことの誤った例として、シャーロット・ブロンテの小説『ジェイン・エア』（1847）を挙げている。ウルフによれば、『ジェイン・エア』の文章には、「激怒」（90）が見られ、「自分が「女にすぎない」ことを認めているかと思うと、「男にひけをとらない」といって抗議してもいる」（96）という。「女にすぎない」とは、男性と比較して、女性が自分自身を卑下し、過小評価する態度で、「男にひけをとらない」は、男性と比べて、自分自身を過大に見せようとする態度である。どちらの態度も、女性のライバルとして、男性を認識した、対抗意識の表われと言える。その対抗意識が、「激怒」となって、文章に表わされていると考えられる。ブロンテが、男性中心主義社会の真っ只中で小説を書いていた、という状況を考慮すれば、自分が女にすぎない、あるいは、男にひけをとらないと弁明するのは、多少やむを得ないことではあるが、ウルフがここで批判しているのは、男性に対する作家自身の「私怨」が、作品に投影されてはいけないということではないだろうか。ウルフがここで誤った例として紹介しているのは、女性作家が、性に対する社会的観念にとらわれた色眼鏡を通して、女性を描くことである。

一方、ジェイン・オースティンの『高慢と偏見』は、「女性として」書いている良い例として挙げられている。それは、オースティンが、「憎悪も、恨みも、恐れも、抗議も、説教もこめずに、ものを書いていた一人の女性」（88）であるからという。「憎悪」「恨み」「恐れ」「抗議」は、ブロンテの文章にウルフが見た「激怒」と同様、男性に対する「私怨」である。オースティンは、ブロンテより半世紀近く前に生き、当時の社会的な状況

を配慮して、彼女は、自らの執筆活動を姉以外には知らせることなく、台所の隅で、ひたすら書きつづけた。そういう状況に身をおいていたオースティンに、男性に対する「私怨」が全くなかったと断言できるだろうか。上に見たBronterの例との違いは、ただ、オースティンの作品には、男性、そして、男性中心主義社会構造に対する個人的な感情が、投影されていないことだとウルフは言っているのである。

ウルフは、また、「自分が持っていないものを欲しがらないのが、多分ジェイン・オースティンの性質だったのでしょう」(88)とも書いている。「自分が持っていないものを欲しがらない」とは、オースティンの文章は、無理に男性と対抗しようとしなくて、つまり、性に対する社会的な観念にとらわれることなく女性の登場人物を描いていると、ウルフは評価しているのである。

更に、ウルフは、女性作家が、「女性として」書くということを次のような言葉で説明している。

女性として書いていますが、自分が女性であることを忘れた女性として書いているのです。その結果、彼女の本の頁には、性がそれ自体を意識していない時にだけ生じる、あの好奇心をそそる性的特質が満ち溢れているのです。(121)

「自分が女性であることを忘れた女性」とは、どういう意味なのか。上に挙げた、Bronterとオースティンの例を思い出してほしい。前者の「女性」とは、男性や社会に規定された存在としての女性で、それは、引用2行目の「性」と同義と考えられる。それを「忘れた女性」というのは、女性に対する社会的観念にとらわれずに書く女性作家を指す。当時の社会が規定した女性の位置付け、女性に対する社会的観念を意識しないことによって生じる「好奇心をそそる性的特質」とは、ウルフがオースティンの文章に見た、女性作家が女性登場人物を描く、社会観念にとられない女性の姿である。

ウルフは20世紀フェミニズム作家の先駆けと見なされている、と先に書

いたが、彼女自身、フェミニストと呼ばれることを心地よく感じていなかったであろう。婦人参政権論者が、女性の権利拡大を求めて、時に過激な活動を展開していた当時、フェミニズムという言葉の持つ多様性が、認識されていなかったから、フェミニストとは、男女平等を目指し女性の権利拡大を求める女性たちと一括りに考えられがちであった。そういう意味で理解されたフェミニストという語は、「女性として」書くことの重要性を志向したウルフのフェミニズム哲学とは、考えを異にする人たちを指す語であったから。

- 1 オースティンが『高慢と偏見』を書いた頃には、「家庭の天使」という名称はなかったものの、その概念は、19世紀以前からあった。

参考文献

- Hughes, Kristine. *The Writer's Guide to Everyday Life in Regency and Victorian England: from 1811-1901*. Cincinnati: Writer's Digest Books, 1998.
- Woolf, Virginia. *A Room of One's Own and Three Guineas*. Ed. Morag Shiach. Oxford: Oxford UP, 1992.
- . "Professions for Women." 1931. *The Crowded Dance of Modern Life: volume two of Selected Essays*. Ed. Rachel Bowlby. London: Penguin Books, 1993. 102-06.
- . "Reminiscences." 1907. *Moments of Being: Unpublished Autobiographical Writings*. Ed. Jeanne Schulkind. New York: A Harvest Book, 1985.

*本文中引用の日本語は、私訳による。

- イザベラ・バード『日本奥地紀行』平凡社ライブラリー (2000)
田島裕『イギリス法入門』有斐閣 (1991)